

《翻 訳》

ダリエンの大惨事（3）

プレブル：〈貿易振興法、1695年5月26日、気高い事業〉

渡 辺 邦 博：訳

原書：目次

1. 高貴な計画
2. 昇る太陽
3. 海への窓
4. 世界の鍵
5. 国民のユーモア
6. 神の素晴らしいお恵み
7. 胆汁のように苦い

本稿は、これまで継続してきたプレブル著『ダリエンの大惨事』の翻訳の続稿である。以下、原書21ページ以下を本号に掲載する。これまで同様に、翻訳該当部分に仮のタイトルを私が付けた。

「そうだ、国民の最大多数が植民地を持つことを望んでいる」

エディンバラ、1695年

〈トウィードデイル〉侯爵は、年老いてはいるが用心深い人間で、リユーマチと悪寒にひどく悩まされながら、ホリールード宮殿にある官邸に滞

在していた。彼の部屋の美しい窓からは、薬草園、アーサー王シートの付近にある木のない公園、セイント・アンの庭で安らぎを得ているみすばらしい債務たちが見えた。議会のほとんどのメンバーなら、会期中にせいぜい一度の聖餐しかとれないのに、議会における国王の代理人として、彼は、一日に50ポンドのごちそうをとるのが許されていた。彼は毎朝、青い服と剣を佩いた竜騎兵の一団で警護されて、6頭立ての馬車で国会に向かい、さらに彼の随行員と大法官、スコットランド担当大臣、判事その他の國務大臣たちのための、もう1台の6頭立ての馬車が、それに従った。警備隊が太鼓を叩いて戦闘準備になっている一方で、この体裁を整え、白粉を付け、鬢をまとめて儀式張った老人たちの巡行は、トロン教会の外にある晒し台脇の無作法な群衆、泉から水を汲み出す女将や女どもの注目の的であった。

馬車の窓から見上げれば、国王の代理人には、街の新しい水平線、切妻のあるアザミ、バラやユリの花などの灰色の台、さらに古い家並みの壁には、昔の重々しい警句が見えた。「あなたは弁が立つが、私は聞き上手だ…」。

奥行40ヤード、横幅16ヤードの国会ホールの中で、黒い十字留め金や水平跳ね出し梁の下、トウィードデイルは孤独な玉座を占領していたが、彼の使命は、目の前のビロードのクッションの上にあった。上院議員と下院議員は、同じ会議室にしながら、生まれと特権との区別を保ちながら、ひな壇状になった席に座っていた。公爵、侯爵と伯爵たちは、玉座の右側の高い列で神にもっとも近い所に、子爵と男爵たちは左側に、彼らの下には、各州の騎士や、市民、そして庶民たちがいた。赤や青から錦となり、黒に至る色が降りて来て、王冠、スコットランドの笏と剣などがある長いテーブルのところで、金や銀、ルビー、アメジスト、ガーネット、青いエナメルと真珠、ダイヤモンド、エメラルド、ヴェルヴェッ

ト、アーミンなどからなる、冷たい輝きで終わりとなった。この1695年6月12日の水曜日、入場の証明書であった白い杖を手にして扉の内側にいた大勢の傍聴人たちを前にして、議会は、あの貿易振興法がはじめて読み上げられるのを耳にしたのであった。議論もなく法令は交易委員会に委ねられ、2日と経たないうちに『アフリカ、〈西〉インドとの貿易に携わるスコットランド会社を後援する法律』とその名を変えた。

低^{ロウランド}地方では、読み書きができるものなら誰でも、その提案が何であるのかが理解できた。5月22日、ジェイムズ・チズリがエディンバラに到着した直後に、市街やコーヒーハウス、居酒屋に短いパンフレットが現れた。それは、『植民地を保有するための基金の提案』と呼ばれたが、証拠を出すよりも推論してみれば、それがパターソンの計画を印刷したものであることを信じるのは容易いことであった。それは、交易を行い、アメリカ、アジア、アフリカに植民地を建設して、スコットランド国王の名において、船舶を購入し、エディンバラに銀行を開設する権限を持つ株式会社を創始する、簡潔で、秩序だった計画であった。それは前触れもなく、しかし適切に始まる。「今や、あらゆる階級の人々、それどころかこの国民全体が植民地の領有を待ち望んでいるのだから、あらゆる場所で広く、ましてやスコットランド王国においても、植民地が有益だなどと説明する時間を必要としない。」会社設立のためのそのパンフレットの第一条件には、パターソンの飾り気のない理想主義が現れている。彼の主張は、人間においてもっとも気高いものとは何かと言うことであった。つまり、その会社は、

(貴族や郷紳に分け前を与えるのを排除するのではないが)、その計画を遂行する能力があり、理事^{マネジャー}たちに不正を働かさないのはもちろん、短気で気難しい社員が、会社を破産させたり、その利益を持ち逃げしたりするような力を委ねたりすることもなく、合理的で永

統的な規則を兼ね備えた交易国民の団でなければならない。

このパンフレットと交易委員会に提示された法案とは、議論と熱狂を惹き起こしはしたのだが、実際のところ広い関心が、芝居がかったものをはるかに上回る何かによって掻き立てられたのだった。3年前にグレンコウの虐殺を調査した委員会が、ホリールード宮殿のロング・ギャラリーで始まったが、ロイアル・マイルのもう一方の外れでは、議会在その報告を待ちわび、国王がそれに関する所見を与える前にはその問題を争う権利など全くないにもかかわらず、議会在報告を受け取るまではその他のあらゆる業務を延期すると明言した。議会在焦ったのは、正義を尊重したためと言うよりも、マクドナルド一族を大虐殺する命令を下し、国王の國務大臣のステア家の当主をここで最終的に引きずり降ろし、撲滅できると言う思惑のためであった。そこでは毎日、色とりどりの行列が繰り返された。国会議員たちが金ぴかの馬車で国会のホールに向うかと思えば、調査委員会のメンバーが自前の馬車でアビー・クロウスにやって来たりで、宮殿の扉が緋色やタータンの度に開閉した。居酒屋や、ハイ・ストリートの広い往来や、または宮殿の馬小屋の傍らでは、調査委員会の立会人たちが見受けられた。はるばるロッホアーバーの守備隊からやって来て、当惑顔の大佐にぴったりとくっ付いている、ジョン・ヒル連隊の士官たち、族長ジョン・マクドナルドやその兄弟であったアラステアの背後に控えた狡賢い一族の者などである。そして、虐殺に対する関与の疑惑はかかっている、確定されていない、油断ならぬハイランドのウナギ、ブレダルベイル伯爵が、国会の投票による被告人として城まで馬車で連行されてきたのは、ある騒々しい朝のことであった。

告発とそれに対する応酬による騒然とした空気の中で、トウィードゲイルは、50年前にマーストン・ムアで自らの忠節を翻した時に見せたことを上回る精神的・肉体的なエネルギーが必要とされた。国会におけ

る調査の長と国会の^{コミッショナー}監督官として、彼は、同じ朝にロイヤル・マイルの両端でしばしば必要とされた。国王と国民の^{しもべ}両方の僕として、彼は、一方を苛立たせず^{しもべ}に他方に従うのは困難であるのが分かった。フランダースからの短気な飛脚は、会期の決着を要求したが、国会ホールの低い段から彼は、構成員が満足のゆく答えを手に入れるまで着席しているべきだと告げられていた。彼は目前の圧力に首を垂れ、もっと遠いところから理解があることに希望を託して、今後一層「閣下の働きが快活で、きびきびと行なわれること」を国王に願った。

エディンバラの商人たちにとって、36名にのぼるハイランドの野蛮人の虐殺に対する責任は、この期に及ぶとほとんど大事なことではなくなった。彼らの関心は、交易委員会を通じて彼らの法案の進展を速め、投票のため国会の議員席に戻ることにあった。彼らのうちの2名は、質問に答え、情報を提供し、約束までして、委員会の構成員たちをなだめるのに主たる関心を持った。2人とも1693年の法律以来、交易会社の熱心な支持張者であり、将来の支払いに対して酒屋のツケを注意深く記録していた。そして2人はチーズリ、ネアンその他のロンドン・スコットランド組の連絡係であった。ジェイムズ・バルフォアは、カリブ海の貿易に希望を託す堅実な経営者で、略奪者の槍との結果として元はと言えば手に入れた財産と土地を所有する穏健なロウランド・レアドの旧家に属する礼儀正しい一団の人であった。彼の名字は正直と公明正大と言うことでスコットランドでは尊敬されており、彼の子孫が『宝島』の英雄にその名を付け加えた暁には、さらに広く知られるようになるはずのものであった。ロバート・ブラックウッドは、毛織物商人であると同時に、ニューミルズ・クローズ会社の取締役だったが、アフリカにおけるイングランドの競争者たちの特権を嫉妬して、ただの格子縞によって、いく度となく同重量の象牙や金を確保していたと言われている。

そうした者たちは、スコットランドの裕福な新興の貴族を代表してい

て、教会の敬虔な支持者であると同時に、議会では政治的に有力な人たちのなかであった。ウィリアム・アーバックルは、グラスゴウの商人でその会社に自らの資金をつぎ込んだ最初の人々の一人だったが、3つの州にまたがる所領の持ち主であった貴族を上回るほどの株に応募することができた。エディンバラ市長は、現在はジェイムズ・チーズリの親類となっているが、元をただせば国王の枢密院に着席する権利を持つ、慣習によって騎士に叙された商人であった。以上の貿易業者たちは、貴族が所有する城郭や連隊を誇りとするように、その会計事務所や、工場、別邸などを自慢としていた。イングランド人のジョウジフ・テイラは、黒や金をあしらった皮革をオックスン・フォード・ホールに吊るしていた皮商人アリグザンダ・ブランド卿の本家で、ファウンテインブリッジの近郊にある、エディンバラのブランドフィールドでかつては食事をしたことがあった。ブランドの娘たちは、それまで繕っていた父親のズボンに脇において、テイラにブランデーやシャンペンを振る舞い、一個の王冠と二つの笏の彫り物の形で一族の逞しい政治学が示された見事な天井の下で、スピネットを演奏して見せた。そして風刺的なモットーには、次のようにラテン語で書かれていた。「これは、108名の祖先から伝えられてきたものである。」エディンバラの通りや中庭、有料道路をみずからの費用で負担して清掃することを申し出たのは、ブランドであった。なぜなら、それが、「世界で一番汚らしい街だった」からである。

その法案の第一次読会に続く2週間の間、バルフォアとブラックウッドは、交易委員会の事務官や構成員にあくことなく接待を繰り返した。もちろん、委員会が開催される財務部の守衛にもチップを与え、コミッションナーのテーブルからもたらされる情報に対する見返りとしてトウィードデイルの従者へのエイルを購入するのを忘れるはずがなかった。2人の商人と委員会構成員が居酒屋「シップ」で夕食をとったあるひどく消耗した夕方、彼らは、子羊の頭、マトン・スープ一杯、ニン

とマトンのそで肉、3羽のカモ、グズベリーをあしらった3羽のチキン、果物、チーズ、パンとエイル、フランス・ワインとブランデーなどを上品に手早く片付け、その後で煙管タバコを平らげた。以上のすべては、バルフォア氏が事細かに記録しているが、コックへの2シリングと給仕への14シリングをも含めて、将来の会社にとって33ポンド5シリングについたことになる。次の夕方、毅然とした出で立ちで、ブラックウッドは「シップ」上で委員会の事務官と合流し、グズベリーをあしらった鶏肉一皿、ロブスターを2匹、カツレツ、アスパラガス、パン、エイルとワイン、煙管タバコを平らげた。それからまた、マックラージでの果てしない何杯ものコーヒー、ピーター・スティールでのエイル、またぞろのウィドウ・グレアムでの夕食があつて、法令の写しが印刷、回覧され、ウィリアム・ロスでの商人たちと軍人たちとの会合があり、バルフォアとブラックウッドが交易委員会に書類を持って現れる頃には、「サン」での「コーヒーその他」に11ポンド17シリングと言う途方もない支出が生ずることになった。

このいずれもが好き放題にやった訳ではなかった。過酷な圧力も、惜しげもない歓待もなかったが、この委員会はずっとその仕事を遅らせ、会期の終わりまでには何ら結論を出さなかった。しかし、6月25日までに法案の修正はすべて合意をみて、それは再び議会に戻された。その会社の特許権所有者ないしは後見人の名前つまり、10名がイングランドの住民で残りの10名がスコットランド住民だったが、その追加のため、法案は再び委員会に差し戻された。委員会の長であったベルヘイヴン卿は、その会社が、どんな印章で、どんな紋章を授与されるべきかについて、スコットランド紋章院部長に助言を得るよう忠告を受けた。これには疑問の余地がなかった。波間から昇る金色の太陽以外に、この国の希望や栄光ある将来を例証するものはありえないと言うことで全員の一致を見たのであった。

事務職員たちは一晩かけて修正の仕事に勤しみ、翌朝の6月26日、法案は再度議会に持ち込まれた。それは読み上げられ、投票がなされ、議論の余地なく承認され、ほとんどいつも通りに片づけられた。一週間前に、グレンコウ委員会がその調査を終了し、ナミュール直前の幕営地に滞在していた国王にすでに送られていた。トウィードデイルは、洪々写しを国会に提出していたが、5日の間、委員たちは何の関心もなく、他にすることもなかったが、それを熱心に討議した。彼らは、ステア家の当主の首を掌握できると感じたが、ハイランド溪谷の流血の大虐殺で有罪とみなされた者たちの処罰を求めて、当日中に、声明が国王の元に送られるべきかどうかの投票を望んだ。法案の支持者たちが、国王の承認を得ることを求めた時には、何ら議論はなかった。トウィードデイルは、自分が5月9日に約束の中で言外に述べてはいたが、会社に関するどんな法律にせよ、通過する前に検討するのが国王の意思であったと承知していたのには相違ないが、これを遅らせる力も勇気も持ち合わせていなかったのである。その後どんな議論もこれを満足のゆくように結論を出すことができなかったが、彼が、国王の許可なしに国王の承認を与える力を持ったのかどうか、明らかでない。年老いてはいたが、彼はおそらく、愛国的な感情のうねりとりこの虜の状態でもあった。笏杖が彼のところに運ばれ、長さ34インチ、六角形で、真珠、櫛の葉と金のイルカで豪華な装飾が施され、聖母マリア、聖ヤコブ、ハイランドのボンネットをつけた聖アンドルーズなどの肖像がエナメル引きされた、金銀の棒が、水晶の宝珠を下げ、静かに法令に触れた。

その夜マイケルの酒場では、何時もなら用心深過ぎる出費と見える2ポンド15シリングで、バルフォア氏とブラックウッド氏が、「ロンドンとグラスゴウの者たち」と共に、アフリカと<西>インド諸島との交易を行うスコットランド会社に乾杯をしたのであった。

その法令の約款に定義されているように、このような会社はこれまで

決してなかったし、再びそのようなものが存在することもなかった。議会におけるその立案者たち、その支持者たちは、食糧置場の扉が開けたまま放置され、親の不在と言う誤解によって勇気づけられた子供たちのようなものであった。次の31年間は、アジア、アフリカ、ならびにアメリカとスコットランドとの貿易の独占があり、そのうち21年間は、砂糖とタバコを例外として、会社が輸入したすべての商品は、税が免除される。10年の間、会社は、「言われるところの地域の原住民との合意があり、それがヨーロッパのいかなる主権国または国家による所有とならない所であれば、「戦争中であれ、そうでない場合であれ、アフリカ、アジア、あるいはアメリカにある、所領、島嶼、国々、および諸地域にむけて」、自前であるいは借り上げた船舶を用意し、積載し、航行する権利を持った。会社は、要塞や町などに、軍事物資、必需品、戦争のための武器などを供給する権利を持ち、攻撃に対して自衛し、報復に努め、彼らが植民した土地における現地の君主たち、総督たち、あるいは支配者たちと条約を結ぶ権力を有する。そして、もしも会社、その所有物、その住民たちに対してヨーロッパの権力からの要求があれば、国王とその部下たちは、賠償金を保証し、確保しなければならない。

その植民地における会社の役員と従業員のすべては、植民地を共同で建設して、その諸規則を受け入れた他の国民の人々と同様に、スコットランド王国の自由市民であり、そこから派生するあらゆる権利と特権とを持つものでなければならない。民間人であるか軍人かを問わず、どのような国の警察官であれ、この会社の構成員なり従業員を逮捕したり、徴用したり、拘留したりすることはできない。そして、もしもこんなことがあれば、会社は、国王の行政官や警察官による疑問の余地なき援助によって、人々を解放する権利を有する。さらに、この会社の構成員はすべて、「その身体、財産、および上記の資本（ストック）や交易に使用された諸商品の双方において、あらゆる方法による、課税、租税、供

出、消費税、兵士の宿営、短期であれ地域的であれ、兵役、その他どのようなものにせよ賦課の類を免除され、それは21年間にわたるものとする。]会社に属する資本的資材、あるいは不動産であれ動産であっても、そのいかなる部分も没収や差し押さえの対象となることはない。そしてこの会社の債権者たちの先取特権は、ただその利潤に対してだけであって、その資本に対する権限には及ばない。

したがって、この会社は、統治を行い、戦争を遂行し、自由を与え、処罰を賦課して、それが欲する場所や相手との交易を行う権利を有する、国家そのものであった。それは、イングランド、オランダそしてスペインの重商主義的植民地帝国に挑戦し、いかなる港湾や海域でも、その国の旗とスコットランドの聖アンデレ十字架をなびかせ、砲火と武力の双方に対する侮辱に応戦することができた。国会ホールの窓からこぼれる6月の日の光を受け、あの笏杖の水晶の宝珠が、剥奪と絶望の1世紀に終止符を打った。この会社はただ国王に対する忠誠だけを受け入れ、この証として、また感謝を表して、国王とその継承者たちに毎年大樽一杯のタバコを約束したのであった。

その法令においては、20名が、別の構成員たちと協力の上、総会と重役会を構成し、株式を発行して、諸規則、法令ならびにこの会社の基本法を作成する権限を有する、発起人と特許権所有者に任命された。そのうちの10名はロンドンからの人間で、2名がイングランド人、ユダヤ人のダゼヴェドー族、パターソンを含む7名がスコットランド在住者であった。スコットランドでは、ジョン・ハミルトン、多分交易委員会で騒々しく運動を展開したことへの褒美をもらったであろうベルハイヴン卿、最高法院副長官であったオーミストンのアダム・コックバン、エディンバラ市長ロバート・チーズリ卿、バルフォア、ブラックウッド、グラズゴウとエディンバラからの2人の商人、従来からの交易委員会の構成員であった3名のロウランド・リードがいた。

その週にジェイムズ・バルフォアは、過去2年半にブラックウッドと共に支出したものを丹念に記録していた紙切れの断片をかき集めた。彼は丁寧にそれを1本の巻物に写して、それを「アフリカ貿易のための国会の法律を手にするために費やされたお金の報告書」と呼んだ。ロブスター、カツレツ、アスパラガス、マトン・スープ、グズベリーをあしらった鴨と鶏肉、チーズとエイル、フランス・ワインとブランデー、煙管、タバコ、コーヒーとチップ、印刷屋と事務員の手数料、最高のロンバード紙の費用、大法官と国璽尚書への支払い、そして「ロバート・ブラックウッド氏と私自身のゴタゴタとサービス料としての2119ポンド12シリング8ペンス/スコツ」なる奇妙な項目。

世界への鍵を購入するには安いものであった。

「われわれは、いかなることにおいても、別々に行動すべきではなく、一体として行動すべきである」ロンドン、1695年7月から12月まで

そして、その会社には2人の頭目があり、それぞれが他方に疑いの目を向けていると見られていた。スコットランドの発起人たちの意図がどうあれ、イングランドの者たちは、役員会がロンドンに設立されるのに違いないとの前提で進んでいたが、続く6か月の間に、子供じみたおしゃべりや説明のつかない沈黙を決め込んだエディンバラの発起人たちは、それが正しいことを確信した。パタースンでさえも、バルフォアに対しては、あの「シッパ」で（「コーヒーその他に3ポンド15シリング」とある）エディンバラの市長やベイリスの前で大声で読み上げられた忠告の手紙によって、バルフォアを矢継ぎ早に批判していたとは言え、その法案が国会を通過して成立するのを援助するためにスコットランドに赴く必要がないと考えていた。

彼らの側では、バルフォアやブラックウッドが、ロンドン在住の自分

たちの仲間が突然、やむを得ずテムズ川で溺れたかのように行動した。その法案が笏杖によって触れられる< =承認される>とすぐに、彼らはグラスゴウとエディンバラの仲間の商人を28名、その会社の構成員として補充をしたが、一人ひとりが、当座の費用として3ポンド・スターリングを寄付し、全額にして13600ポンドの価値に相当する株に応募する約束であった。これは、まだ自らを役員会として確立していないロンドンの者たちに先んじる、つまりは応募を開始することであった。そうは問屋が卸さなかった。と言うのも、スコットランドには誰一人、この法令の写しを彼らに送ってやろうと言う者はいなかったのだから。以上のようなにべもない相違の背後には、それ以上の対立があったのである。スコットランド人は、その会社が、彼らを過去の政治的宗教的な専制から解き放ち、その法令によって許された、要塞、都市、弾薬、海軍にもとづく、豊かで、商業上の未来をもたらす植民地力とみなした。ロンドンに住む者たちは、パタースンを例外として、東インド会社の油断ならない独占があまりに長かったので、この植民地ではなく、むしろスパイス諸島やインド亜大陸の搾取の方に関心を持った。

パタースンは、ロンドンの人たちの代弁者であることを受け入れて、むしろ困難な仕事に対するその発声力と不屈の能力を持続させて、自らそうしていた。彼は、ロバート・チーズリ卿がエディンバラ発起人たちの責任ある構成員だから、次の3ヶ月彼は市長との粘り強い、一方の側の通信員をいつも通りに継続して、この法令の複写が必要なことを訴え、いく人かでもスコットランド人が遅延なくロンドンに来るべきだと主張していた。彼は、自分の同郷人が、委員会で言い逃れによってやる気をなくするのがよくないのを知っており、とにかく行動を要求した。「何であれ、最初の熱意がなくて進むならば、ファンドの立ち上げは、ほとんど、ないしは決して成功しない。大多数の人は、普通は、理屈ではなく、先例によって導かれるものだ。」

この年のロンドンの夏は尋常ではなかった。日中は暑く、おまけにジェイムズやハナ・チーズリと夕食をとったり、セント・メアリウール・ノットでジェイムズ・ファウルズ、またはセント・デイオニスのバックチャーチでトマス・クーツと正餐をとるために、パタースンがシティに赴いたり、ハクニーに跨がっている時、おそらくゴミや悪臭を鎮めることになった人目を引く落雷によってぶちこわしとなった。ロンドンにいるスコットランド人たちは、この会社に関心を持つように説得されて来たイングランドの商人たちの間に焦りが増大していることに気がついていた。イングランドのスコットランドに対する伝統的な軽蔑、スコットランド人のイングランド人に対する長年のねたみ、それに加えて両者の宗教的・政治的違いは、この会社の最初の産声があがる前に、それを破壊しそうな勢いであった。パタースンは、こうした先入見が、ロンドンでよりもエディンバラの方がおそらくは強力である気配を、正しく察していた。彼はロバート・チーズリを説得してそれを無視するように述べたし、彼の手紙では、ユダヤ人のダゼヴェドを含めたなら、おそらく誰かが眉を上げると示唆している。「この気高い事業においては、どんな立場であっても差別をせず、誰であれ（われわれの誰か一人であっても）その民族や宗教が何であっても、利害と性質を同じくするものとみなされなければならない。」

チーズリやその仲間たちは、おそらくそうした手紙の中の横柄な調子や、教師風のスタイルに憤慨していたのだろう。彼らは、パタースンが、描き上げた計画の背後で、この問題について行ったこと、つまり、彼が威張り散らして歩き、彼らに対してビジネスを説いたということが理解できないので、この誇り高い人間のことを、不満を持って解釈していたのであった。バルフォア氏の出金報告から分かるように、彼の声がデンマーク通りに到達するはるか前に、会社や法案の提案について取り沙汰されていたのであった。だから、あの法案の写しが送られなかったのだ

ある。それがエディンバラを8月中旬頃に離れた頃には、新聞記者によって発送されて、パタースンやその友人たちがその一言も読まないうちに、フリート・ストリートの居酒屋やコーヒーハウスで広まっていた。「われわれは大変驚いた」、と彼は不平を漏らした。「われわれのような関係者が手に入れる前に、われわれにとって当然の支持者ではない者の手によって印刷された国会の法令があるのを見たことには。」支持者ではないとは、東インド会社やアフリカ会社の重役や株式保有者たちとホワイトホールの役人たちのことであった。パタースンの明晰な頭脳からみると、もっと悪いのは、ロンドンの発起人たちの名前にひどい間違いがあったことである。法令では10ではなくて11名が記されていたが、それは、ジョウジフ・コウエン・ダゼヴェトを、ジョウジフ・コウハインとダヴェ・オヴェドと呼ばれる2人の部外者に代えた、スコットランド人事務員とスコットランド人印刷業者のせいであった。

パタースンがチーズリから受け取った手紙の内容は、漠然として、落胆させる内容であったが、1名のスコットランド人が特定できないある日に、ロンドンを訪ねただろうと言うこと以外には、何もありません。パタースは、少なくとも3名は、それも直ちに派遣されるべきだと答えた。「ここにいる人々は、事態の行く末をすでにいやと言うほど気がついているが、われわれは、鉄は熱いうちに打ち、速度を早めることだ。」役員会がしかるべく設置されるなら、直ちにすべてがうまく行くし、ロンドンがそのための場所であるのは疑いがない。「なぜなら、この地のいく人かのジェントルメンの忠告と助力なしには、助言を求め、資金を頼んでも、しかるべき基礎を築くことは、不可能であろう。」最良の頭脳と最高の資力、つまり、イングランドとスコットランドの両方において、両者の協力があれば、この会社は繁栄するのである。

結局のところ、スコットランド人を待たずに、ロンドンの人たちが、8月29日木曜日に、最初の公式の営業の会合を持った。その日は、ど

んよりした寒い日で、ソーホーの空一面に霞がたなびき、冬が近いとの気配があった。チープサイドとチャリング・クロスでは、大火が起こり、通りでは酔っぱらった群衆が騒々しかった。その朝、国王の勅書送達吏のフライ氏が、ナミュール陥落の知らせと共に低地地方から到着した。それは、ウィリアムの3000名から成る火打石軽小銃隊・火トカゲのクッツ卿が指揮して外壘への頑強な行進を行い、フランス人が展開したマスケット銃と投石とによって兵員の3分の1を喪失した流血の事件であった。国王自身が落命したとの噂もあり、数日前に、オックスフォード・ホース伯爵と言う気がふれた将校が、剣とピストルを振り回し、オランダ人のウィレムが亡くなったことを否定するような者は殺してやると脅かしたこともあった。群衆は彼を鞍から引きずり降ろし、アプチャーチ・レインに流行の飲食店を所有し、故あってそれまで秘密にしておいた噂を始めた、フランス人ポンタックと共に、ニューゲイトに連行した。

会合は手短で、長らく秘書の仕事をしていたローデリック・マッケンジと呼ばれた若い公証人によって、手短に、効率よく取り仕切られていた。彼の先祖がハイランド人であるかどうかは明瞭ではなかったが、彼のクリスチャン名はその部族の間では珍しいものではなかった。しかし、彼には良家の出であるという自負があり、時おり私信にハープの封印をしたり、シーフォースの鹿の頭を使ったりもした。彼は好感が持て、親しみのある人物で、他のスコットランド人亡命者からは、短くローリーと呼ばれた。彼は明瞭な筆記体で物を書き、2名の職員の助けによって、キッチンと時間を守り、この日からその会社の12年後のみすばらしい終焉に至るまで、この会社の忠実で熱意ある社員として働き、時としてその特権に対する執着が強く、人を欺き、武力を用いて、無実の間人を絞首刑にすることもあった。この晩、黄昏にもかかわらずロウソクもつけずに、彼はこの会社が記録した最初の決議文を書きとめた。

決議。この会社の一員となることを望む者は誰であれ、書面にて出資するそれぞれの金額と共に、個人名を、その記録を行うローデック・マッケンジに、申し出なければならない。

決議。上記のローデリック・マッケンジは、少なくとも現在会合する構成員の多数による特段の指示がなければ、前記の個人名、金額、それにかかわる事柄を、いかなる人物、または複数の人物たちにも、明らかにすることはしない。

決議。この会社の約款が制定されるまで、あらゆる必要経費の支払いに対して、金銭が徴収される。

7名の構成員が出席し、そのすべてがスコットランド人であった。そして、ダゼヴォドと2名のイングランド人の欠席の詳細については、何ら理由が示されなかった。各人は、25ポンドを、必要経費、インクのコスト、紙とロウソク、事務職員とエディンバラの郵便料金、ワインとエイル、タバコとパイプに対して、負担することに合意した。ジェイムズ・ファウルズが、会計係に選出され、マッケンジに小額現金で20ポンドの前払いをするように指示を受けた。その後、彼らは外套を羽織り、松明もちの少年を呼んで、煙の中を帰路に就いた。

パターソンは会合の知らせをスコットランドに送り、代理人が送られるのを再度要求した。「この地の紳士たちは皆まじめに催促しています」。そして数日後、「われわれはますますあなたから任命を受けた人たちのお越しを願うのが日増しに分かります。国会の会期が到来する以前からこの地での業務の決着をつける必要が、ますます増加しています。」と言うのも、ウィリアムが戦争から戻り、その秋に上院と下院が開会すれば、イングランドの貿易会社は、総出で、成り上がりの、厚かましい、もぐりの営業を行うスコットランド会社をペチャンコにしようとするからである。

もしも彼らがそんなことをこれまでやっていなかったのなら、東インド会社が、国王に対する請願を考慮しており、取り沙汰されているのは、このトラブルについて国王が寛大なお考えを示されるのを懇願しています。ここには、少なくとも公式には、スコットランド会社が他でもない墓場でしかない、とのことが含まれているものではない。シリー諸島沖で停泊して、時にはプリマスやワイト島からでも目に入る、フランスの私拿捕船が、つい最近2隻の古風なインド交易船を拿捕しましたが、それは、イングランドの会社全体にとって、非常に高くついた損害であった。お偉方が東インド会社からその援助を引き揚げているので、会社の株は94から74に下落してしまいました。ロンドンの人たちが、今回はダゼヴォドと共に9月26日に会合を持ったが、彼らはソワソワしていた。おそらくはイングランド系の会社の代理人たちが出どころでしょうが、酒場のうわさによると、彼らは、野蛮な者たちや、ジャコバイトの寄せ集めですらあって、国王に謀反を働き、イングランド人やその政府を中傷するために集まっていたのだと言われる。その日に行われた唯一のことは、この件に関する動議が可決しただけであった。

なるが故に、情報によれば、この会社のいく人かの敵対者が、この会社に関して、まるで、イングランド政府や人民の権力をこの会社に関係するいく人かが、公然と避難めいた、下劣な言い方をした、あるいは、この会社の構成員たちが、あらゆる機会に、イングランドの政府や人民のことを公然と話題にするくように命じたかのような憶測を海外で熱心に流している様に思われる。つまり、彼らは、考えられる限りでの誠実さを持っているにもかかわらず、熱意も反省もなく、特定の個人ないしは複数の人間の反対意見を排除したり、鎮めたりしようと努力するく命令を出したとか、ローデック・マッケンジが、欠席した構成員にこの決議内容を知らせるよう命令を出したとか、言うのである。

この動議の言葉遣いは、それがパタースンによって作成されたことを示唆しているが、その語調は、このうわさにいささかの真実があったのを暗示している。すなわち、イングランド人からかわれる前では、自分の感情を平静に保てないので、スコットランド人の中には、自分の国とその会社の防衛のために大胆な言い方をし過ぎたのであろう。誇りを持ち野心がある人なら、静かに歩を進め、注意深く話をするなど言うのは困難であったのだ。

市長がこれまで以上に頻繁に手紙を書いたように思われるのだが、秋になっても、スコットランドからの確信はなかった。「われわれは、この件は書簡による交渉が可能であるのご意見を未だお持ちの方がおられるのではないかと、危ぶんでいます。」とパタースは彼に痛烈に述べたのであった。エディンバラには、鞍には色んな乗り手がいて別々の旅行が行なわれると言う強い感触が存在した。ロンドンの者たちは、スコットランドに代理人を送るべきであった。パタースンはこの中には入らない。この会社は、イングランド資本による強力な支援がなければ、失敗する。「基礎を固めるのは、ここ以外では不可能である。われわれはすでに、これまでの手紙で、僭越ながら急ぐようお願いして来たし、もしあなたが、この手紙を受け取った後ほんの数日でお越しになるのを怠ることがあれば、事態のすべてを危険にさらすことになるでしょう。」スコットランド人は、遅くとも11月初日までにロンドンに来なければならぬ。

イングランド国会の両院はすでに開会していたが、その月の終わりまで休会していた。イングランドの会社の代理人たちは、上院下院議員の上着を捕まえるため、ウェストミンスター・ホールに出現していた。さらに、その年の終わりまでにこのスコットランドの小児の喉を捕まえ、それが乳離れする前に絞首刑に処すことは、何ら秘密ではなかった。国王はフランダースから10月10日に帰国して、マーゲイトに上陸、貴族、

諸州からの騎士、シティの紳士と商人たちからなるお供の集団と共に、ロンドンへのゆっくりした勝ち馬の行進を行った。彼の気分が国事に関わる諸問題やスコットランドに関係することだとは誰も言わなかったし、9か月前に彼の非のうちどころがない女王が亡くなって以来、普通以上に冷淡で、内向的な状態であった。彼は彼女の髪の毛から拵えた巻き毛を身に着け、左肘には、黒いリボンの付いた腕輪をして、軍隊と共にイングランドを離れているのに最高の幸せを感じていた。彼がフランス人の殺戮から戻った時、彼はウィンザーでの鹿狩りや、ニューマーケットで自分の馬が走るのを見ることで、気を逸らすのを好んだ。彼はロンドンのたき火や鐘の音に背を向け、ケンジントンの孤独な宮殿に足を向けた。そこで彼は、自分の留守中の枢密院による配慮の行き届いた統治に満足し、彼らに対して国会の解散と11月22日の招集を指示した。

ロンドンの人たちは、新たな国会の開会まで何ら干渉を予測できず、それ以前に彼らは理事会を組織し、エディンバラからの代表の出席の如何にかかわらず、株式募集を開始しなければならなかった。彼らは今や定例の会合の場所、ナサニエル・カーペンターと言う名で同調の意思のあるシティの商人が所持するクレメンツ・レインの赤いブロック造り3階建ての建物に集結していた。その大きな振り子時計のチクタク音、彼の4人のこどもたちのわめき声、イーストチープにあるセント・クレメントの鐘の音などが、彼らのヤキモキした悩みに対する伴奏となった。10月22日、彼らが午後3時に会合を持った時、通りでは、怒鳴り声と口論のけたたましい騒音がしていた。シティ出身の4名の国会議員が、ギルドホールで選出されていた。この日はまた、国王の馬がニューマーケットでタウン・プレートを勝ち取り、東インド会社は、もう1艘の船がフランスの私拿捕船に敗れて、その株は76から54<ポンド>に下落した、との知らせを聞いた。

取締役たちは、通りの群衆が暴徒に変わる前に帰路に就くのを願って

素早く業務を終えたが、それはこれまで開催したもっとも重要な会合なのであった。風評の拡大に鑑みて、「ここで通過したあらゆる会話や議事録を極秘とする」ことに再度合意した。その後彼らは、2つの主たる解決策を通過させた。会社の株式募集は、11月6日に開始されるはずとなった。資本基金は、60万ポンド・スターリングに設定され、株式募集の開始の時点で、その3分の1が引き受けられるはずとなっていた。

パター슨の心は、高揚させられ、ついに何かあることが行われた。次の数日間に以下のことが決議された。つまり、会社の理事会は、その法令に記名された人々を基礎とすること、その人たちは構成員を50名まで増加させる権利を有する理事会として記載されること。さらに、株式で1000ポンドないしはそれ以上の株を保有する30名の「所有者」^{プロプライエタズ}が存在することになる。信頼回復ムードの中で、10名の重役たちは、東インド会社の株が、まだその最低水準に達したままだと聞いて気分をよくしたであろう。投資家の多くは、スコットランド会社の潜在力について慎重な調査を行っているところであったが、東インド会社からの引き上げがあまりに深刻になったので、重役たちは、総会を招集して、船舶や積荷や乗組員たちをフランスに奪われたことをあからさまに認め、25%の償還金がなければ会社の業務は維持できないと明言した。

スコットランド会社の株式募集に際しての前文は、マッケンジの明晰な筆さばきで書かれているが、この時点でパター슨が新重役会のもっとも重要な構成員であったことを仄めかしていた。なぜなら、彼と彼に関係のある他の人々が、「両インド内と、またその双方にとって、それに劣らず商業会社のために、欠くことができない権力と特権の確保にあたり、多大な労苦と犠牲を」払ったからであった。彼は、最初の応募金に対しては2パーセントの、さらにその後21年間にわたる利益の3パーセントを受け取るようになっていた。それは、信じられないほどの権利であったが、冷静で経験豊富な商人たちがどうしてそれに同意し

たのか、ほとんど理解不可能である。あらゆる点においてパターソン自身が示唆しているように、それは、長くは続かなかつたにせよ、彼が時折他の人に対して行使した抗い難い力を示すものである。

マッケンジの書記官たちは、株式募集の最初のページに付いてほとんど定めがなく、告知がなく、今に至っても不測の事態とされた場合には、洗礼名を記入した。エディンバラからの3名の発起人がロンドンに到着した。つまり、バルフォア、ブラックウッド、そしてイングランドのスパイであったジョン・マッケイによると、「丸まるとして、デッキリとして、色が黒く、騒々しくて、貴族と言うよりも、肉屋に似ている」と書かれた、愛国的雄弁家のベルヘイヴン卿である。11月9日のクレメンツ・レインでの最初の会合に出席した時、彼らの誰一人として機嫌がよい者はいなかった。彼らは全員がその前文を読んで来ており、誰しもそれに対して不満を持っていた。彼らは提案された資本の大きさに驚き、スコットランドの財力が、要求される半額を満たすのに充分かにどうか疑いを持った。パターソンの簡明な雄弁は、自分の演説を印刷して自らの雄弁を方向付けたり、その階層、風貌、あるいは隠喩、直喩、寓話、比喩、長い演説などを果てしなく送り込んで今や会合を支配してしまった、ベルヘイヴンのような熟達した話し手には太刀打ちできなかった。ロンドンの者たちは、スコットランド人がエディンバラをその会社の固有の基地とみなしたことを素早く見て取ったが、パターソンのかの地での影響力は、ロンドンで必要とされるよりもずっと小さいだろうとみなしていた。彼らはスコットランド人にそれほど大きな資本の募集の必要性を受け入れるように説得したけれども、彼らは、パターソンがエディンバラに手紙を書いて、この必要性を説明し、スコットランドのあらゆる雑誌や記録の写しが、再びスコットランドに送られるべきだと言うことに同意していた。

今や毎日のように重役会の会合があり、不協和音が常に絶えなかった。

通常は調和が取れなかった。マッケンジの覚え書きは、簡潔ではあるが、カーペンター氏のロウソクを燃え尽きさせる論争を示唆していた。「つまり、異論が申し出られるたびに、・・・業務に関する論争が発生する。・・・さらに、スコットランドから代表に選出された人たちによっていくつかの反論が生ずる。」・・・スコットランド人による主要な異論は、スコットランドの専売特許権所有者の中に、資本的基金に対する負担の大きさが分かった時点で撤収してもよいと主張している、前文の制限と約定に対してであった。そしてまた、彼らを大きく混乱させた、もう一つ別の問題が存在した。その時点では明るみに出さなかったけれども、それは、彼らの提起した別のあらゆる異論の背後に横たわるものであった。これは、その会社が交易を開始し、何人たりとも利潤の保証を得ることもできなくとも、パターソンに認められた多額の報酬のことであった。そこでバルフォアは、彼に償還する報酬が提案されることがないとみなしたし、ブラックウッドも、聖餐、夕食、アザラシの脂、便箋、つまり彼らが出席し、骨を折ったことに対する正当な費用についても同様だと考えたのである。

11月11日、東インド会社は、スコットランドについて公式の関心を示した。その議決によると、〈東インド〉会社の構成員は、いかなる点でも、誰であっても、宣誓を破ることなく、お互いに連携してはならない。3日の後、その会社はケンジントンで国王に請願書を提出し、諸問題の最終結果を国王に提示した。つまり、戦時におけるひどい損失、スコットランド会社が提案した不公平で、おそらくは違法な競争のことであった。国王は何ら所見を述べることなくこの請願を受け取り、ウィンザーで狩りをして、ガーター〈勲章〉の選挙総会に出席するために出かけて行った。

誰もそれを認識しておらず、彼らの会合の議事録の中に認めていないようだが、スコットランド人に対する警告は明らかだった。彼らは、時々

些細な問題を巡っての場合もあったが、時には穏やかで、判断力のある企業人らしく振る舞い、議論を継続した。後者の場合には、ロンドンの商人だったダゼヴォド、ネルン、チーズリに通常はよることがあった。彼らは、8名の新たな取締役を認めたが、その全員がイングランド人で、自らかあるいは代理ですぐにも株式応募の用意があり、正当にも、会議の定足数と過半数は、元構成員ではなく、株主の直接指名を受け、代理人の権利を行使する新構成員から成立すると決議した。ここに至ってマッケンジの議事録は、堂々と、かつ上品に議題がつけられた。「アフリカ、インド諸島との交易を行うスコットランド会社の取締役会において・・・」

パターソン辛辣で疑い深い批判者であったロンドンのスコットランド人、ロバート・ダグラスは、11月22日に取締役の一員に認められたが、パターソンは後年、彼<ダグラス>が病となるのを企んだスコットランドのある派閥の代理人であったと言い立てられた。それは事件の日であった。ロンドンの株式募集は30万ポンドの同意額に到達して、その朝に締め切られた。『スコットランド議会の最近の法律に関する諸考察』と命名された小冊子がまた公刊されたが、それはまるでパターソンが書いたかのように読める。それは、この会社がイングランドの敵対を認めた唯一のものであり、かつ、差し迫る惨事を避けようとするただ一つの試みでもあった。それは、イングランド人は、この会社を恐れることは何もない。もしも彼らの望みが商業上の優位を保つことなら、自分たちの貿易法を緩和し、スコットランドに対する攻撃のエネルギーを浪費すべきではないと、あっさりと主張していた。

その朝はまた、イングランドの国会が新たに招集された。国王は上院に赴き、下院に議長を選出するように要請した。次の朝の11時、国王が玉座から、戦争、自国の兵士の勇気、鑄貨での国民の貢献について表明した。彼があいにく、戦争の継続のため兵士の補充と貨幣を再度要求

せざるをえず、議会に対して、両方を増加させる新たな方法を考えるように力説したのは不幸なことであった。彼は、商船の増加と、東インド貿易の奨励を示唆した。彼の望みは、議会におけるあらゆる事業に関する迅速な公文書ができることだったが、その理由としては、翌春には、フランスがこの方面で、先んじるかも知れないということであった。

11月29日金曜日、ウィリアム・パターソンの取締役会での影響力ある役割が、突然停止した。それも自らによってである。ベルヘイヴンの司会で、カーペンター氏の邸に20名の人間が集まった。そのうちの6名が新たなイングランド人の取締役であった。さらに2名が、ユグノーのポウル・ドミニクとオランダ人ダニエル・ヴァン・ミルダートであった。これに、ロバート・ダグラスとエディンバラからの代理人たちが加わり、パターソンにはほとんど同感や援助があてにできない多数派を形成した。その日の業務は、3時にローデリック・マッケンジが、法律で禁止された信託財産に関する満場一致の誓約を読み上げることで始まった。

ここに姓名を署名したわれわれは、全能の神とこの会社の存在を前に、以下のことを宣言し、約束する。アフリカと両インドとの貿易を行なうスコットランド会社に、共にであれ、別々にであれ、関係を持っている限り、われわれは、時に応じて、この会の会長によって秘密を守る責任を与えられたことがらについては何であれ、漏らすことはなく、われわれのそれぞれの立場で、われわれの力の限り、上記の会社の利益や利害を促進する努力を行う。

以下のような仕事には、この会社の従業員によって行われるべき同種の宣誓にもとづく合意が含まれる。また、東インドの貿易に送り出される、単数であれ、複数であれ船舶を獲得する決定。貿易委員会がこの運

営のために選出される。

会議での演説のためにベルヘイヴンに出発を頼んでから、パターソンが立ち上がった時、それは駆り立てられた訳でもないが、彼が口にするすべてのことには、圧迫や重圧が言外に含まれていた。出席する人々の多数が、彼に与えられた特殊な利益に怒りを持ち、その怒りをあからさまにしたということを自覚していた。彼が特権や利益を主張したと述べたけれども、それは、この会社の正義や寛大さ、あるいは会社にとって彼が有益だと言うことについて疑念があったからではなく、人間が恩を忘れることについて彼には苦い経験があったとの理由からだった。彼は、方法、場所、日時について言及はしなかったが、この気高い事業に対して、自分自身とそれ以外の人々の金銭を1万ポンド近く投資したのだった。また、それまで「10年にも渡る労苦と遍歴があり、6年間に及ぶ歳月のすべてが、この会社の計画を促進するのに注ぎ込まれて来た」が、ここでもまた彼は、時と所については何も述べてはいない。彼がこの会社の苦難に耐え、疲弊した創設者だったとの主張は、バルフォアやブラックウッドによって無言のうちに承認されたが、この人たちは、同じ仕事に4年以上をかけた。それは、パターソンが差し出すよりもはるかに大きな証拠であった。関与の証明となる度重なる出資の存在を知っていたからである。

パターソンは、途方もない言い方で、「この会社は、私が全幅の信頼をおく正義と感謝を与えてくれた多数の卓越した人々で満たされており、私は、私の心が広く、潔白であることを示すのにこの上もない光榮な機会が存在するに相違ないと考える。私は、募集の前文に盛られた2パーセントや3パーセントを快く、すっきり停止、あるいは辞退して、さらに私に会社から与えられた、非常に盛大で、品位ある贈物をお返しする。」と、述べた。

そこで、取締役たちは、それを撤回し、そのことで彼に謝意を表明し

た。この大胆な権利放棄が、甘い言葉に包まれてはいても、彼に対する交付金を確証する提案であろうことを疑う兆候は全く示さなかった。何年も後になって、人々がこの会社の残骸を巡る諍いをして、彼らが1ポンドをつぎ込んだ所で、1ペニーをつかみ上げようと躍起になった時、パターソンは、自らの上品な振る舞いを後悔した。その時まで、ソーホーの一室には、一人の貧しい数学教師がいて、彼の言うには、彼が財布を緩めたのは、只々信頼に基づいたからに過ぎなかったけれども、既にほかの人たちや、議会での援助のための支払いを望んだスコットランドのお偉方の求めにも2パーセントが約束されているとの嘘で説得されたと言うことであった。そしてこのことに間違いはなかっただろうが、彼はまた一方では、何の証拠も提示していない。

それはロンドン取締役会による開催としては最後の会合であった。12月3日、上院は国家の現状を話し合った。「特にスコットランド東インド会社について」と、その夜自らの日誌にナーシサス・ルットレルは記している。「その会社は、われわれの貿易にとって有害となったとみなし、長時間にわたる議論の末、それに関して次の木曜日に関税委員会の開催とともに、東インドの貿易を行うあれこれのイングランド商人も出席すると決議された」。翌日の取締役会の議事録には、すべての議事録を秘密にすべきだとの互いに一度ならず警告していたにもかかわらず、この危険性についての言及は一切ない。彼らは、できるだけ早くスコットランドで株式募集が開始されることを急がせ、バルヘイヴン、バルフォア、そしてブラックウッドに前文の準備をするように教唆した。イングランドの取締役たちは、カーペンター氏の邸宅で彼ら自らが決めたとの時間に到着してもとのスコットランド風のやり方には耐えられず、欠席者と遅刻者に対する罰金を課すると言う、時間を守る厳密な規則がなくてはならないと主張した。

12月6日の金曜日、東インド会社とアフリカ会社の役員たちが上院

の証人喚問席で、「スコットランド会社が原因で生ずる不便に関する」ことを聞かされた後、取締役たちは、時間を厳守しない場合、あるいは欠席の場合に半クラウンの罰金を科すと言うスコットランドでの募集に対する前文草稿を考え、唯一の正しい時間は、カーペンター氏宅の振り子時計によって示されることで合意した。彼らは、遅くまで業務を行ない、金曜日午前10時での再会を決めた。

これが、議事録の最後の記入であった。翌朝、上院は全員その法律に記名されている者の中から、7名を指名して、喚問席に出席することを命じた。

原書 41 ページに続く

